◆2022 年 1 月第 1 週の礼拝説教
■日時：2022 年 1 月 2 日（日）
■説教題：「霊の導きに従って歩みなさい。」
■聖書：ガラテヤの信徒への手紙 5：16－26（p349）
■讃美歌：6「つくりぬしを賛美します」・462「はてしも知れぬ」

明けましておめでとうございます。

オンライン越しに礼拝に参加されている方も、おめでとうございます。

2022 年を迎えました。

立川教会創立 71 年です。

昨年から作成に入りました『70 年史』も、最後の校正に入り、1 月末には皆さんにお渡し出来ると思います。

読み応えのある、皆さんの立川教会への思いが溢れた素晴らしい記念誌です。大切に目を通していただければと思います。

2022 年最初の礼拝に与えられた聖書の箇所は、ガラテヤの信徒への手紙第 5 章 16 節から 26 節、年の初めに相応しい御言葉が与えられました。「霊の導きに従って歩みなさい」です。パウロがこの手紙をガラテヤの信徒に宛てて書いているその場面を思う時、思わず襟が正されるのを覚えます。私たちの日々の生活において、パウロは「霊の導きに従って歩みなさい」と勧めます。一体、霊の導きに従って歩むとはどのようなことかを、御言葉に導かれながらしばらくご一緒に考えてみたいと思います。16 節です。

１６：わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。

「霊の導き」に逆らうもの、それは「肉の欲望」です。

続く 17 節で、パウロはさらに詳しく述べます。

１７：肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているので、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。

「肉の望むところは、霊に反し、霊の望ところは、肉に反する」。

パウロは、肉と霊とは相容れることはない、対立し、敵対していると言います。そして、肝心なのは、それ故に、私たちが「自分のしたいと思うことができない」と言うのです。

もう少し、この問題について、パウロが言おうとしていることを見てみたいと思います。

18 節です。

１８：しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。

ここで、「霊」と「肉」とは別に「律法」と言う言葉が出て来ます。そして、霊に導かれているなら、私たちは律法の下にはいないと言うのです。

律法の下にはいない、つまり、律法が支配している世界から解放された自由な世界にいると言うのです。この自由な世界、613 にも上る掟に囚われることなく、自分の思うがままに生きて良い世界です。生まれて間もない 8 日目に受ける割礼からも、断食からも、安息日からも、聖句の書いた札を身に着け、唱えることからも、これまで自分の人生をがんじがらめに縛り付けて来た一切の掟から自由であると言うのです。

しかし、パウロは同時に、このすぐ前の 13 節から 15 節で、次のように警告しています。

１３：兄弟たち・・・この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。

１４：律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。

１５：だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

パウロの警告は、私たちは、律法から解放された自由な人生に生きている。しかし、その自由は、肉の欲望のままに生きるような自由ではなく、愛によって互いに仕え合う自由、互いにかみ合い、共食いし合うような自由ではなく、隣人を自分のように愛する自由、そのような自由として用いるようにとの勧めです。

そして、19 節以下で、肉の望むところは何かを例示します。

19 から 21 節。

１９：肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、

２０：偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、

２１：ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。

パウロが上げている肉の業の項目は、15 あります。

この時、私たちは、これらの項目に、ただ目を通すだけで終わらせることは出来ません。何故なら、一つでもこの項目に当たることをしているとすれば、その行為によって神の国を継ぐことは出来ないからです。

ごく身近な、言い換えれば、最も陥りやすい肉の業を 3 つ挙げるとすれば、どうでしょうか。私の場合は、何と言っても第 1 に利己心です。自分さえ良ければ良いと言う思いです。自分を愛せても、隣人を愛することが出来ない心です。

第 2 に、怒りです。自分を理解されないでいること、又、不当な扱いを受けていると思うことへの怒りです。

そして第 3 は、ねたみです。自分よりも優れた存在に対するねたみです。

このような、利己心、怒り、ねたみ、それらに共通するものがあります。それは、隣人を裁いていることです。自分を義しいとし、相手が間違っているとする心、自分を勝っているとし、相手は自分ほどではないと思う心、それは、結果として相手を裁いているのです。そのような心が、いつでも心の内から頭をもたげて来ます。その度ごとに、内なる戦いが始まります。

しかし、同時に、その一方で救いがあります。22、23 節です。

２２：これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、

２３：柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。

先に述べた肉の業に打ち克つことです。絶えざる肉の業との戦いを強いられつつ、しかし、霊に導かれてある時、私たちは肉の業に打ち克っている自分を知っています。その時の自分は、霊の結ぶ実の中で以下の３つを近しく思います。

第１は、親切です。親切と言うより、良く気が付くことです。少しでも皆が気持良く過ごせると思えば、あまり労を厭いません。会堂は勿論のこと、教会の庭や玄関の掃除、駅やスーパーなど誰もが使うトイレを使用すると共に、少しでも綺麗にすること、集会室の湯呑の渋み落し、困っている人がいて、自分に出来ることがあれば手伝いたいと思う気持です。

霊の実の結ぶ内容として、第２と第３は、自分がそうであると言うより、そうありたいと願うことです。第２は、寛容です。他者の間違いを受け容れる心を持ちたいです。そして、第３は、誠実です。何事にも、誠実に対処したいです。

以上、私が囚われの内にある肉の業と、私の願う霊の導きについて述べましたが、そのような願いを持つ私たちに、パウロは、重要な指摘をします。

肉の業から解き放たれ、霊の導きにあるために求められていることです。

それは、24 節です。

２４：キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。

主イエス・キリストの十字架の根本的意味です。

この 24 節は、同じく５章２節と響き合います。

349 頁上の段です。

２：ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。

換言すれば、もし割礼を受ける、即ち律法に再び囚われて生きるなら、キリストの十字架はその人にとって無意味になると言うことです。キリスト教信仰とは無縁になることです。

もう一度 24 節に戻りますが、ここでパウロは、見過ごすことの出来ない言葉を述べています。「キリスト・イエスのものとなった人たち」つまり私たちです。私たちは、キリスト・イエスのものであることです。すでにイエス様の所有となっていることです。

イエス様の所有となっているとは、私たちも又、イエス様と共に十字架に着けられたのです。イエス様が十字架上で死なれたのは、私たちの罪をその身に負って死なれました。それ故、私たちの肉に巣食っている罪は、イエス様が負い、十字架上で滅ぼされました。その時、私たちの肉の業も又イエス様と共に十字架上で滅ぼされました。私たちの内なる肉は、すでに滅ぼされたのです。

そのことを信じて生きる私たちに、パウロは呼びかけます。25 節です。

２５：わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

信仰とは、すでに完成したものではありません。

行きつ戻りつの道です。

にもかかわらず、確かなことがあります。

口で告白し、バプテスマを受けた私たちは、霊の導きを知らされていることです。

その導きに与れることです。

霊に導かれて歩む時、心の内は平和で満たされます。

全ての悪意は消え去り、恵みに包まれた感謝の時が訪れます。

だからこそ、そのような霊の導きを知らされている私たちは、26 節です。

２６：うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりするのはやめましょう。

時として、肉の誘惑に襲われ、過ちを犯すことへの注意です。

以上が、2022 年を迎えた新年礼拝で、神様から私たちに与えられた御言葉です。

この 1 年、肉の業を退け、霊の導きに従う者として歩む力を、神様に日々祈り求める者となろうではありませんか。

祈りましょう。